踏 み 跡 ＜ My mountains ＞

北アルプス	北アルプスやたらに歩記	No. 137

業務多忙な夏で夏休みを取る暇がなく、ついに11月に入ってしまった。
まずは草野さんの誘いで、彼が所属する立教大学物理学部山の会の山小屋で開かれる山小屋祭りに参加することにして、あとの残りは北アルプスを適当に歩いてみることにした。

昭和　44年　11月　1日
草野さんと新宿駅で 12 時半に待ち合わせ。予定していた 14 時 50 分の急行は運転中止で、特急も超満員。結局 15 時 54 分発のアルプス 6 号に乗ることになったが、これも国鉄スト・順法闘争のあおりで、発車したのは 16 時 30 分、超満員で、辛うじて座ることができたという状況。おまけに走り出してからさらに一時間半の遅れで松本に着いたら大糸線は終電車、しかもこれも 30 分遅れで発車。

昭和　44年　11月　2日
信濃大町着は 0 時 15 分。もちろんバスはもう走っていない。ストの影響で終バスに間に合わなくなったと駅員に食ってかかる人垣をかき分けてタクシー乗り場へ。
タクシーで 20 分ほど、鹿島川を遡り大谷原のバス終点で下車。星空の下闇をまさぐりながら歩き、立教大学鹿島の小屋に到着。荷物をまとめてすぐに就寝。
起床 5 時 15 分、天気は快晴。朝食はおじや。昨日小屋に集結した面々はほとんどが鹿島槍を目指して 5 時頃に出発したらしい。
我ら2名は 45 分遅れで 5 時 45 分に出発。
平坦な道はいつからか上流へと工事が進んだらしく、以前より奥まで続いている。その工事の影響だろうか、西俣出合いの沢の形もかなり変わってしまっている。
高千穂平 7 時 55 分。ここまでワンピッチで登ってしまった。草野さんは長身なのでストライドが長く、しかもかなりハイピッチ。飴玉をなめながら小休止。高千穂平を過ぎると、もう今年の雪が足元に姿を現し始めた。コンディション良好でお互いにハイピッチでも疲れない。
稜線着は 8 時 50 分、冷池へは 9 時に到着。毛勝三山方面を頭に剣、立山・・・・爺ケ岳、種池、針ノ木付近まで見渡せる。11 月ともなれば剣・立山はもう冬の装いだが、ここはまだ穏やかであまり「冬」を感じない。
5 時に出発したメンバーの最後尾ののんびり組に追いついてしまい、「速い、速い」と驚かれた。高度を上げるにつれて槍を中心とした山々と、薬師を中心にした立山への稜線が姿を見せて来た。登りながら色々な山が段々姿を見せてくるのが楽しい。この楽しさは頂上での感慨とはまた違った独特なものだ。布引岳の南側で 30 分休んで朝食。

鹿島槍ヶ岳 10 時 50 分。先発・後発／先着・後着全員そろったところで記念撮影。
下りは冷池で軽いおやつを摂っただけで、西俣出合いまでワンピッチで下り、小屋へ戻ったのは 15 時 20 分。
何でも、この小屋ができて以来の山小屋ノートの記録によれば、小屋から鹿島槍の往復を 10 時間以内でやった人はいないと言う。我々（草野・小林組）は今日 9 時間 35 分で往復し、「山小屋新記録を樹立」ということらしい。特に登りの 5 時間は素晴らしい記録だと皆から褒められたり冷やかされたりで、結局ゲストながら山小屋ノートに一筆書かされるはめになった。
夜はストーブを囲んで水炊きの晩餐会。ビールに酔った後は、ヒンズクシの山のスライド映写会そして 19 時からは河原に出てキャンプファイヤ。酒・ウィスキー・歌、そして真っ赤な炎。21 時半から小屋に戻りナポレオンで飲み直し。一日の心地よい疲れと酒と旨い食事とで、本当に良い気分で 23 時就寝。

踏 み 跡 ＜ My mountains ＞

昭和　44年　11月　3日
起床 8 時、天気は曇り。快いほどの疲れと酒とで実によく眠れた。朝食は納豆と卵と味噌汁。
休暇がある数人のメンバーはカクネ里へ雪を踏みに出かけて行った。残りのメンバーは三々五々帰り支度。
次なるターゲットとして燕岳を選んだので、帰京する草野さんとともに四日市へ帰る人の車に便乗し、有明駅迄乗せてもらうことにした。
有明 12 時 15 分。雑貨屋でナイフを購入して、バス停の時刻表を見ると次は 13 時 55 分となっている。すると、これを見ていた南安交通のタクシーの運ちゃんが、「タクシーで行かないか？」と声をかけて来た。1300 円は勿体ないなと思って断ったら、「いくらなら行くかね？」、すかさず 「500 円ならまあいいけど･･･」、「じゃ、乗んなよ」。車のメーターは空車のまま（つまりエントツ）で踏切を渡って走り出した。途中ですれ違う車と長々と世間話をしたり（その間は勿論止まっている）ののんびりしたドライブ。世間話の内容を聞いていると、どうやらこの土地に長く住んでいる方らしい。この辺の話、バスの話、山の話、中房温泉の話などなど色々と話を聞かせてもらっているうちに中房温泉に到着。時計を見ると 14 時 20 分。
「泊まる所は？」「特に決めてないけど」「山登りだから安い方がいいね」、国民宿舎有明荘にかけあってくれた。タクシーを降りるときに、「ほんとに 500 円でいいの？」 「いいよ」。タクシー代 500 円を払って運ちゃんと別れた。
宿に荷を置いて、今日はゆっくり休養。谷間の散歩で時間をつぶしたり、優雅な夕暮れ時。
明日は常念まで足を伸ばしてみようか。針金で修理した登山靴がどこまでもつか？これが一番のカギだろう。

昭和　44年　11月　4日
晴れてはいるが、あまりすかっとしない空。
6 時 40 分出発。バスの終点で水を汲み、合戦小屋への登山道へ。体が軽くコンディションは悪くない。
燕までの高度差は 1000m を超える。よほどうまく歩かないと長続きしない。しかし、昨日の鹿島槍ピストンがちょうど良い準備運動になったようだ。中房川の谷沿いにポツンと立つ中房温泉の赤い屋根、谷間の木々はすでに秋を過ぎて、寒く寂しい冬を迎えようとしている。
まず 350m の急登に汗ばむと、第一ベンチと呼ばれる展望の良い尾根上に飛び出た。体が冷えない内に、調子が落ちない内にとの思いで 5 分ほどの小休止ですぐに歩き始める。
合戦小屋はすでに閉館しているので、小屋の横の砂地に腰を下ろしてカリントウをかじる。シーズンオフの北アルプスはこんなにも静かなものなのか、風に揺れる枯れ枝の音とカリントウをかじる音の他は何も聞こえない。
合戦小屋を過ぎ、さらに 2489m の三角点を越えると緩やかに登る巻き道となり、燕山荘に到着、ちょうど 10 時。
さすがに 11 月、北西風が強く吹き荒れてじっとしてはいられない。雪がないのが不思議なぐらいの寒さ。
まずは第一峰の燕岳のてっぺんへ。鹿島槍、烏帽子のとんがりと野口五郎岳の幅広くどっしりした姿が印象的。野口五郎はどこが頂上かわからないようなのっぺりした広がりだが、南の大天井は幅広く裾をひいた鈍角の三角形をした山。見るからに登るのに手を焼きそうな大きさである。
閉館・下山の準備に大わらわの燕山荘の前で、風をよけて昼食。
11 時出発。行く手に大きく広がる大天井岳の懐に向かって歩き出す。空は雪が降る前のような、黒く重い雲と台風の影響もあろうか強い風。
蛙岩とか為衛門吊岩とか奇妙な名前の岩場を過ぎて、大きな登りをクリヤすると大天井岳の頂上の小さなカール状の窪地に出た。窪地の中に大天荘が冬を迎える準備として、荷降ろしと小屋の補強を進めている。
風は相変わらずの強さだが、大天井を過ぎると梓川から吹き上げる南西の風に変わってきた。風向きひとつを見ても複雑な地形や山容の影響を受けているのがよくわかる。
ザクザクと砂礫や岩を踏んでの軽快な足取りの時間が過ぎる。この感触は 3000m に近い山ならではのものだ。
常念小屋 14 時。小屋はいくらか針葉樹が現れ始めたところにある。綾線より梓川側にあるので、槍・大喰・中岳・

踏　み　跡　＜　My　mountains　＞

南岳・キレット・北穂・唐沢岳・・・・・、何度数えても飽きない素晴らしい眺めが楽しめる。
今日は初めての体験として、北アルプスの山小屋で一泊二食+弁当付きで泊ってみる。小屋代は 1550 円。
食事の前に優雅に一時間ほどの昼寝。初めての山小屋の食事は、タマネギの味噌汁、ピーマンとタマネギが入った卵焼き、ハム、キャベツの千切り、リンゴ 1/4 を二個。食事の後は小屋の人と泊り客三人とで談笑。遭難の話や山の動物の話から木曽の塗り物の話まで。小屋の従業員の中に木曽平沢の塗り物師の倅という人がいて、木曽や会津の塗り物と漆について色々話を聞かせてくれた。
窓の外は、キレットに沈む夕日。そしてしばらくすると、闇となった穂高連峰の何箇所かにポツンポツンと光る山小屋の灯り。

昭和　44年　11月　5日
起床 6 時 30 分、天気は曇り。一面の霧で視界は 100m 程度という悪さ。木々は白く霧氷の衣装をまとい、寒い。
出発 7 時 55 分。昨晩談笑した大阪の男は一ノ俣へ、京都の女性二人は須佐渡へとそれぞれ下って行き、稜線上に残ったのは私ひとりだけになった。
常念への登りに入ってしばらくして、ハイマツ帯の中をゆっくり歩いていた時のこと、一ノ俣の谷間の霧の海の中に奇怪な物を見つけて立ち止まった。一面の霧の海の中をアタックザックを背負った大男が歩いている。しかも男の周囲には阿弥陀来迎図に見るような後背のような七色の後光が。これぞまさしくブロッケン現象だ。
時刻は 8 時 20 分、上空は青空で稜線はガスの動きが激しく、安曇野側からの強い朝の光とガスとが微妙に影響しあっている様子がうかがえる。ブロッケンが見えている時間はわずか 10 分程度に過ぎなかった。朝日が上がるにつれて、一ノ俣の谷間に映った自分の姿は二度と見えなくなってしまった。
一生の間に一度見られるだろうかというようなこの怪奇な自然現象をただ呆然と見入ってしまったが、事終えて冷静になってみると、カメラを持ってこなかったことが悔やまれた。
ブロッケン現象と別れて 15 分で常念岳頂上に到着。さきほどまで梓川の谷を覆っていたガスは徐々に高度を下げて、その上に浮かぶように穂高連峰が現われてきた。快い朝日のぬくもりの中でスケッチブックと洒落こんだ。
蝶に向かう頃になると雲の流れが速くなり、時には雲の中を歩くようになってきた。雲の中にいる時にはパラパラと雪の乱舞にも遭遇し、冬が顔をのぞかせている感じがしてきた。
我が最愛の登山靴は、つま先のビブラムが剥げて口を開けてパクパクと喘いできた。何とか徳沢までは持ちこたえてくれ！と念じつつ、紐と針金とで補強して蝶ケ岳の頂に立った。静かな冬季小屋の脇の陽だまりで昼食。
蝶を下り始めると急に高度を下げ、針葉樹林に入るとヒンヤリと涼しさも増してきた。大滝小屋から徳沢を下り、徳沢出合いへ二時間余。徳沢は荒れ果てて大きな岩がゴロゴロしていて歩きにくい。眼の慰みは、出合い近くになると正面に肩を怒らせて立ちはだかる前穂の偉容。
徳沢園の 100m ほど手前までたどり着いたところで左靴がパックリと大口を開けてしまった。止むなくビッコを引きながらゴールイン。
井上靖の小説「氷壁」で一躍有名になった徳沢園は唐松林の中にあり、二階のテラスからは前穂が見上げる高さ、そして横に目を移すと、霞沢岳と六百山。11 月ならではの静けさと寂しさ、はかない命の植物たちの秋、それとは対照的な山々の大きさと豊かさ。
一泊二食付き 1800 円、しかもここまで来て入浴できるとは思わなかった。同じように山に入りきっている髭モジャの男と風呂の中で山話。
小屋で釘をもらって登山靴の修理。明日はのんびりと上高地周辺散歩でもしてみることにした。

昭和　44年　11月　6日
6 時 15 分起床、天気快晴、7 時 25 分出発。
今日はまったくのんびりした散歩をすることにし、細かなメモもとらないことにした。
行き先は奥又白谷。
かなり荒れた谷で、落石が頻々と起こり安心して歩いてはいられない。ひとかかえもふたかかえもあるような巨岩がゴロゴロ・グラグラしており、谷が廊下状になるところでは転がってきても逃げ場がない。奥又白池まで行ってみようかと思ったが、F1までで止めて、その後は屏風のコルへ。
奥又白谷でケルンを、屏風のコルで涸沢と槍をスケッチして梓川に戻った。

（左：奥又白谷のケルン）

次は明神池に立ち寄り、今日の宿は山のひだや。明神池は普段は有料だが季節はずれで番人がいないので無料で見学できた。水の美しさは絶品で、湿地も形成しており大正池の砂地よりもグッと深みのある池である。静まり返った晩秋のしかも夕暮れの明神池は、美しさのほかに不気味さも漂わせていた。龍神でもあらわれそうな、そんな幽玄さに体が固まっ

た感じさえした。ふと異様な物音に目を向けると、二羽の鴨が氷を割りながらシャリシャリと音をたてて泳いでいる。
まったくのんびりした一日を過ごして、山のひだやの玄関に入る頃はもう暗闇の世界。ただ自家発電のエンジンの音だけが鳴り響いていた。

昭和　44年　11月　7日
起床 6 時 40 分。昨晩は－11 度まで下がったらしい。
真冬ならば大して寒くもない温度ではあるが、さすがに 11 月の体には冷たく感じる。出発 7 時 50 分。
明神付近から見る前穂はただ尖っているだけで面白味がない。雄大さというかどっしりしているというか、そういうものがなく、「岳」という響が持つ稜の変化がない。
それが徳沢を過ぎて河童橋に至るまでの道からの眺めとの違いである。やはり前穂を見るのには徳沢の方が良いという結論に達した。
朝の河童橋から焼岳を背中に背負い岳沢をスケッチ。
ぐるりと回りを見渡してみると、世間が騒ぐ穂高連峰よりも霞沢岳の方が一段と逞しく見える。
田代橋を渡って中尾峠への道に入ると湿原になる。
湿原の中をしばらく行くと何となく温かな空気を感じるようになってきた。足元を見ると、小さな沢の流れが実はお湯。田代橋を渡ってから一時間半ほどで焼岳小屋がある中尾峠。峠を飛騨側に少し下ると、笠・錫杖・抜戸と連なる山々の大展望。
峠の小屋はシーズンオフで人っ子ひとりいない。空の青さと笠ケ岳の眺めをおかずにしての昼食とレモンのひと休み。
峠からわずかに登ると柵がめぐらせてあり、「危険なため立ち入りを禁ず」となっている。目前に煙をモクモク吐く頂上があり硫黄の黄色い匂いが誘っているので登らない訳にはいかない。バラ線をくぐって火山地域に入るとグズグズの柔らかい土と息苦しいほどの硫黄のにおい。
わずかに雪が付いたルンゼに、あてにはならなそうな踏み跡が付いている。
峠から一時間半で焼岳頂上。ここしばらく人が寄りついた形跡がなく、昔あった筈の中の湯への下山路も見えない。火山帯が続く遥か下の方に、その昔溶岩の通り道だったと思われる小さな割れ目を沢山残した笹原が続いている。笹原の中を注意深く見ると一筋の道が走っているように見える。地図と実景とを頼りに、その一筋の道らしきものを目指して強引に下ってみることにした。
不安定な足場に気を使いながらゆっくりと下って行くと、カールの下の笹原に予想どおりの道が付いていた。
おまけに所々にペンキでルートマーキングまでされている。だが、どう見ても道は中の湯方面に向かう一本だけで、安房峠への道はない。一瞬喜ばせてくれたペンキのマーキングもやがてはなくなり、結局薮こぎとあいなった。熊笹の中の薮こぎの次は雑木林。木の間に見える霞沢岳が刻々と見上げる高さになっていくことで、下界が近付いていることがわかる。
山頂を出発してから 1 時間 45 分、付いた所は中の湯の 100m ほど上のバス道路の上の崖。中の湯の赤い屋根を目前にして崖の上に立ってしまった。最後は石垣の低そうなところを選んで飛び降りて、無事終着駅となった。
焼岳から下りてきたというと、中の湯の人達は皆驚いていた。ここから登っても皆迷ってしまい頂上にはたどり着けないし、ましてや、頂上からここへ下りて来た人はいないと言う。
こんな具合で我が 7 日間の 「北アルプスやたらに歩記」は終点となることができた。
最後の夜は、中の湯でゆっくりとお湯につかることにした。

昭和　44年　11月　8日
バスを待っていると一台のタクシーが釜トンネルの信号待ちで止まった。窓がスーッと開いて運ちゃんがこちらに向かって声をかけている。見ると、11 月 3 日の午後に有明から中房温泉まで 500 円で乗せてくれた運ちゃんだ。後の客席には新婚さんらしい二人連れの客が座っている。松本から上高地へ向かうところだと言う、メーターは 4500 円を超えている。トンネルの一方通行待ちで「寒いから中へ入れ」と言うので助手席にずうずうしく座らせて

もらうことにした。そして、新婚さんそっちのけで運ちゃんと山の話。
10 時 20 分のバスで下り、松本から急行に乗車。
かくして鹿島槍に始まり焼岳に終わった夏休み兼秋休みの山旅は、「The End」 マークがを引きながら走る急行列のシーンになった。一週間を振り返りつつ車窓の夕暮れ見物を楽しむことにした。
「大谷原から 9 時間半でピストンした鹿島槍」、「河原でのキャンプファイヤー」、「500 円で乗ったタクシー」・・・。
初めて登った山は、燕、大天井、横通、常念、蝶、大滝、そして焼岳。
夢にしか見たことがない、そしてこれからも見られるかどうかわからない「ブロッケン現象」、「奥又白谷の落石の轟音」、「壊れて直してまた壊れた登山靴」・・・・・・。思いだしてみても限りがない。
ふと我に返ると、車窓はいつしか夜景が迫るようになっており、もう都会が近いことを示していた。

以上